LCC News Letter１７

28 March 2011　LCC広報担当

夏目漱石と学習院英語教師の座を争った重見周吉

１８８４年に同志社英学校を卒業した重見周吉は、米国エール大学の医学部を卒業して帰国し東京慈恵医科大学で教鞭を執っていましたが、本場で習得した英語の力を生かそうとして、学習院の英語教員の採用試験を１８９３年（明治２６年）に受けました。

唯一つの学習院教師の座を重見と競った夏目漱石は後年、「私の個人主義」という著作の中で、「学習院の　教師になれると思い、学校へ着て行くためモーニングも買っていたがアメリカ帰りの重見という人物に学習院のポジションをとられてしまった。」と書いています。不採用になった漱石は松山中学の教員として都落ちします。

（図らずも、名作「坊っちゃん」の誕生へと繋がります）

重見の故郷、愛媛県今治市と同志社大学は、平成１２年１１月３日から５日まで、今治市制８０周年・同志社創立１２５周年記念として、今治市に於いて、「同志社・今治モダンフェスティバル」を共催で行い、記念講演に同志社女子大学の河野仁昭講師が招かれ「今治モダンニズムを考える」と題して話されました。

平成１２年１１月１１日の愛媛新聞に「今治出身の重見周吉、漱石の運命を変えた。学習院採用で明暗」と大きく報じられたので、地元の人々にも重見の存在が知られるようになり、市長始め多くの市民が、この時、初めて重見周吉に興味を持つようになったのです。

尚、後援には、今治教会、横井時雄(同志社第３代総長)徳富蘆花などがあたりました。

菅　紀子の翻訳本

重見が学費を得る目的で著した英文エッセー「A Japanese Boy by himself」（日本少年）は、日本の平民の文化と生活を紹介しています。

作品中に描かれている当時の日本は、西欧人にとっておとぎ話の国であったようです。１８８９年、アメリカで出版された後、約１００年の時を経て西欧の古書市場で発見されたのです。

因みに、晩年の重見は、病に苦しんでいる人々を救うことに人生の価値を見出し、生涯を通じて博愛に生きるため、東京の下町で医院を開業していましたが、１９２３年の関東大震災で裸一貫の身となりました。しかし、同志社英学校の同級生、安部磯雄らが、重見の窮状に手をさし伸べたという美談も残されています。

（文責：北出　至）